

空の発見 Discovering the Sky

渋谷区立松濤（しょうとう）美術館 2024.09.14～11.10



我々が毎日見ている「空」。現代では誰もが共通のイメージを描ける当たり前の存在に思われるが、日本の美術のなかでは、近世になるまで「空」を現実的に描こうとする意識は希薄であった。「障屏画」では、黄金地や金雲などがこの空間を占め、「水墨画」では余白のような位置づけである時もあった。

そして、明治以降、本格的な西洋画教育や科学的な気象観測の導入を受け、刻々と変化する「雲」や「陽光」を写しとろうとする画家たちが次々と登場した。

香月泰男 《青の太陽》1969年 油彩/方解末、木炭 カンヴァス チラシ図

ジョン・コンスタブル 《デダムの谷》1828年 油彩/カンヴァス

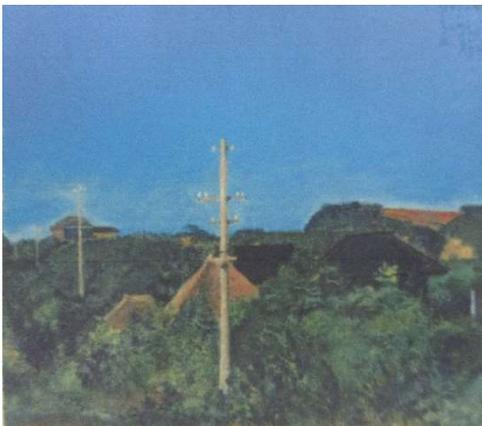


本作の本当の価値は、画伯の揺れる光を描く見事な技巧と「自然の明暗法」に加え、雨模様の一日の美しい表現にあり、風景が陽光の下で輝いている。

画伯がお気にいりの、イングランド東部のエダム村と遠くの河口までの眺めは、太陽光の反射を強調するために白のタッチで塗料を厚く塗布している。

気象学を絵画に反映した作品は、発達する雲や雨柱などの変わりやすい天気は、抑えた筆使いは湿度を感じさせて、吹く風方向まで筆の動きでわかる。

岸田劉生 《窓外夏景》1921年 油彩/カンヴァス



劉生は病氣療養のため転居した神奈川・鶴沼で、抜けるような青空の夏景色を描いている。日記には、「二階窓外風景にかかり、だいたい仕上げる。もう一日一寸直すかも知れないがまず完成した。

もっと突っ込めば突っ込めるが、まあこの位にしておこう。」と記している。